

第二章 サラセン帝國

サラセン帝國は遊牧民國家の典型の一である

サラセン帝國は一二八二（六二二）年より約十年間にアラビヤ半島西部ヒチャーズの一都市メダイナ（マデイナー）で形成された豫言者ムハムマツド（マホメット）を中心とする新宗教團體を母胎として生れ先づ全アラビヤを後には西アジアの大部と北アフリカ・ヨーロッパの一部にまで擴大したものである

ムハムマツドの新宗教とは唯一最高神たるアラの教で數千年來各部落に分裂し自己の部族に對する獻身的精神より外には何等國家的觀念と云ふべきものを持たなかつたアラビヤ人はこの新しいイスラム（イスラーム）教によつて一つの新體系を與へられ史上空前の大發展を遂げたのである

ムハムマツドは一二三一（五七一）年にメツカ（マツカー）に生れ四十歳頃メツカ近郊のヒラー山の洞穴にて瞑想中初めて神の啓示を受

け自ら神の使徒（ラースール）なりとの確信を得た。その教の根本は「アラブの外に神なくムハムマッドはその使徒なり」としてイスラム教の絶対権を強調した。当時メツカの支配権を握つてゐたクライシュ部族中のウマイヤ家の一門はその頃のアラビヤ人を風靡してゐた多神教の聖殿カーバの管理者として利益を獨占してゐたためかかる新宗教運動を嫌ひ遂にこれに迫害を加へるに至つた。一二八二（六二二）年ムハムマッドは北方三百哩の所にあるヤスリブ（後のメディーナ）の市民の勧めを容れ數百名の信徒と共にメツカを去つてここに移つた。これがヒジュラ（聖遷）である。聖遷以後のムハムマッドは從來の如き一豫言者たるに止まらず政治家としての活動を初めた。かくて彼の生涯がヒジュラによつて大轉換をしたと共にアラビヤの歴史ひいて世界史の運命も亦局面を轉換することとなつたのである。

三二

（附） 衰亡の原因

0036

一 ウマイヤ朝は占領地民たるシリヤ人を重要視しその力によつて勢力を得たが一方に於いてはその弊害を醸して衰亡した

ムアーウィヤはシリヤ人（主としてキリスト教徒）を重視し軍事財政 學藝等各方面に重要な位置を與へた シリヤ人を以て優秀な軍隊を作りこれを以つてアラビヤ人中の反抗分子を鎮壓したこれはアラビヤ人のみならずイラン人をも不満とした アッバース朝はこの不満分子を利用して起りウマイヤ朝を打倒してこれに代つた

二 アッバース朝は政治文化の中心をイラクに移しアラビヤ人よりもイラン人が主要な位置を占めた

即ちウマイヤ朝及びアッバース朝共に原住民即ち被征服民を重用し過ぎて禍根を殘してゐる

三 版圖は極めて廣くなつたが交通聯絡の施設はこれに伴つて發達せず邊境の地方は中央から分離する傾向が段々に強くなつた

四 各地方の總督の權力が増大しカリフの掣肘を脱ししかも世襲となつて行つたのは弊害の大なるものである

地方長官は原住民その他を利用して家族化し手兵を養つた

五 サラヤン帝國はもとと遊牧民國家の發展形態でありそのため徒らに貢納制に依據し直接に生産力の培養に力めず重税乃至高壓による叛亂を招き易かつた サラヤン帝國の王朝的交替はこれに基く所が多

い

六 アラビヤ人の血液の純潔さを保つことを重んぜず混血が盛に行はれたことは衰亡の一大原因である

七 アラビヤ人自身にも次の如き缺點が著しくて自ら衰亡の種を蒔いてゐる

(一) 個人主義が強く同族間の權威を認めない

(二) 部族精神が強く到る所で部族對抗の争闘を繰返した(黨派觀念が

強烈であつた)

ハ 宗教上の分裂

シーヤ派ハーリジュ派カルマ派等イスラム教間に多くの宗派が別れて相抗争した。これもサラセン國家衰亡の重大な原因の一つである。

第一節 建 國

サラセン帝國の開基はムハムマツドによりて行はる

一 ムハムマツド時代

ムハムマツドは先づ一二八四（六二四）年のバドルの戦を契機としてイスラム教徒はアラブは自分らを嘉し給へりと確信しムハムマツドの政治的勢力の基礎が安定となつた。即ちこの戦まではイスラム教はメ dinaなる小都市内の宗教たるに過ぎなかつたがこれより後はその教の普及する所が悉くその國家の内に入ることとなり約十年にしてアラビヤ全土を包含するに至つたのである。註二

イスラム教の聖典をコーランといふ。これは天啓の結集にほかならない。